



ノーサイド

禍害と被害を超えた論理の構築

(6)

～ 混乱からの脱出～

中村周平

今回は、病院を退院してからの在宅生活について触れていきたいと思います。北の大地で教えていただいたトレーニングを自宅でも続けていく中で、自身の体に起きる「変化」に気付いていきます。また、両親と事故のことについて話し合う中で知ることとなった事故の認識の違いが、それまで無意識のうちに避けていた自身の事故と向き合うことに。

前回までと同様に、「私へのインタビュー」、「両親

へのインタビュー」で交わされた会話の内容を手がかりに、当時の私と両親の心境についても書き出していきたいと思います。

以下、表記は筆者=S、北村さん(インタビュアー)=I、父親=T、母親=Hとする。

3 在宅に移っての生活

1) 体の変化、生活の変化

退院して3日後には飛行機で北海道へ渡り、事故直後から連絡を取っていた男性と初めて会うことができました。そして、トレーニングは会った次の瞬間から始まりました。精神を集中して体の動きをイメージする訓練、椅子に体を固定しての座位の訓練、床上での寝返り、壁に固定されたバーを使っての上肢の訓練。これまで体験したことのない独自のトレーニングを重ねていきました。そして、極めつけは冷蔵庫を背にしての立位の訓練でした。

I:「医者のおうとおりにせんでも、なんとかして回復していきたいという気持ちがある。ところが、そうは上手いこと事は運べへん、やってもやってもうまくいかん、そういう感覚というのになっていくわけ？」

S:「そうですね、ちょっとずつ、完全に目に見えて取れる動きはなかったんですけど。北海道見に行つてトレーニングしたことで、血圧全く下がらなくなって、今では立っても血圧下がることは殆ど無いので」

I:「どういうトレーニングしたの？」

S:「体ぐにゃぐにゃなんですけど、病院に半年間もいて座るのも大変だった人間を突然二人がかりで抱えて冷蔵庫を背に立たせはるんですよ。膝だけ押えて倒れてこんように肩押えて。血圧おちそうになったら、暗くなるんですけど、血圧下がったら膝をポーンと抜いて、下にズルズルと降りて戻ったらすぐ立たす。結構スパルタですよな」

それまで、座っているだけでも血圧が下がって気を失っていた体は、その訓練の最中に何度となく気を失いました。それでも繰り返し立位を続けていく中で、少しずつ血圧が下がって気を失うまでの時間が長くなっていき、それに比例して立つ時間も長くなっていきました。5時間に及ぶそのような訓練を8日間「家に帰っても同じように訓練ができるように」と、指導を受け、京都の家に帰ってきました。そして、そこからトレーニング漬けの毎日が始まったのです。

I:「それは中村くんのためのメニュー？」

S:「だけじゃないですよ。女性の方を8年間リハビリしてはったんですけど、寝たきりから松葉杖で歩く

とこまでをやってこられて。その8年間の中でいろんなトレーニングをしてこられて、その中で使えるメニューを教えてもらった。椅子に体をくくりつけて、前後に体を振ってもらいながら、腹筋背筋に刺激を与えるトレーニングだとか、病院では絶対にやらないトレーニングを考えはって、これやったら他の人にもいけるんやないかって。最初は情報発信のつもりで、ネットに情報を流しはじめはったんですけど、全国から会いたって言う情報がいっぱいきて、全国から来られる頸椎のリハビリを一人8日間のリハビリを受け持って」

I:「今でもやってるの？」

S:「ずっとやってはります。(中略)開かなかった脇がちょっとずつ開くようになり。最初思っていた、立って歩きたいという気持ちからはちょっとずつ小さくはなってるんですけど、ちょっとずつ反応が出だしたのも確かだったんで、なにかその回復がちょっとでも長く続いたらいいなと思って」

朝から晩まで、1日の大半をトレーニングだけに明け暮れていました。「事故に遭うまで頑張っていた部活動の代わりに、今はトレーニングに励む」そのような気持ちを持って取り組んでいました。体に筋肉の反応が出だしたり、血圧が安定しだしたり、本当に微々たる変化ではありましたが、回復している自分を確かに感じていました。

しかし、病院を出るということは家族だけで全ての介護を引き受ける必要がありました。ご飯を食べる、風呂に入るなど生きていく上で当たり前のことをするための介護だけで、一日が終わってしまいました。家族が限界を訴えるまで1ヵ月とかがからなかったと思います。その時、私や家族の支えとなってくださったのがヘルパーの方々でした。2003年度から始まった障害者福祉制度である「支援費制度」を利用して、退院した翌月から、ヘルパーの方が訪問介護に来てくださるようになりました。家族ではない人が常に家にいるということに抵抗がなかったといえばウソになると思います。しかし、私や家族を支えようとしてくださるヘルパーの方々の気持ちが少しずつその抵抗を無くしていってくれました。当初、お風呂だけの介助だったものが、日中に入って

いただく時間が徐々に増えていきました。

2) 不安が「不信感」に変わるとき

事故から時間が経過していく中で、事故について、家族とも監督やコーチとも話をする機会はありませんでした。特に家族とは、事故のことは話をする気持ちになれませんでした。ある日の夕食後、いつもはするはずもない事故の話、その日は何でもないきっかけから両親と話すことになりました。そのことを契機に、自分の事故と向き合うことになっていきます。事故が起きてから病院に運ばれるまでの両親の行動や学校からの連絡、集中治療室に入っていた時の様子など、私の中で記憶があいまいな部分や知らないことをたくさん話し合いました。「そんなことがあったんや、全然知らなかった」と思う一方で、一つ引っ掛かる話がありました。それは両親の口から事故が起きた当時のことを聞いたときです。

S:「やっぱり気持ちが離れてきたのかなって寂しさみたいなものはありましたね」

I:「それはどっか不信感に変わっていくわけ？」

S:「変わっていきますね」

(中略)

I:「その入院ときはまだ不信感まではいかへんけど、あれ？これってどうなん？そんな感じぐらいで退院するわけやんな？」

S:「退院したのが5月で、その後ずっと在宅に戻って家族とヘルパーの方とリハビリを続けていましたね。で、家に帰ってからなかなか会うってことはなかったんですけど、それでもたまに家の方に顔出してくれはったりとか、病院のリハビリの時間見つけてきてくれはったりとか、それで連絡は取れてたんですけど」

I:「監督とね」

S:「はい。なんか家族とも退院してから、事故のことは半分タブーではないですけど、暗黙の了解とは言わないですけど、そういう方向には話がいかなくて」

I:「事故のことに具体的になんかということがタブーやったん？」

S:「事故のことに触れるというか、当日の話をするこ

とすら家族の中ではしなかったですね。というも

家に帰ってから忙しかった。今でこそ、ヘルパーの方が生活の中心に入ってくださってるんですけど、その時はまだ限定的で...例えばこの時間2時間だけ来て下さいとか、風呂のこの時間だけお願いしますとか。家族の中でも抵抗みたいなものがあったので」

I:「それはそうやな、家の中に他人が入ってきはるわけやから」

S:「そういったのに慣れていくのも、家族の中で時間がかかってしまって。いっぱいいっぱいでしたね。ただ、そんなに話さへんかったのに、ある日突然話

I:「それいつごろの話？」

S:「たぶん9月頃」

I:「9月、そやから退院してから4ヶ月くらい経ってるわけやな？」

S:「はい。秋頃だと思うんですけど、家族とそういう話をするようになって、ぼろっと僕の首の上に乗った子の名前がでたんですね」

I:「それは知ってたわけやろ？」

S:「僕は知ってたんですけど、その時にオカンから聞いた名前が僕の知ってる名前じゃなかったんですね」

I:「監督が言ってた名前ではなかった」

S:「『それ違うで』って話になって、そこから家族のなかで、僕は監督からこう言われたんやけどってことを言ったときに、両親は事故の当日、監督じゃなくてコーチにこうこうこういう経緯でなってしまったんです、みたいなことを聞いたらくて」

事故が起きた経緯は私が記憶しているものと変わりませんでした。首の上に乗ってしまった人の名前が、私が監督から聞かされた名前とは異なる人物でした。両親はその人の名前をコーチから説明されたいと言います。また、それ以外にも事故当日の自身のプレーについて全く知らない話も耳にしました。では、私が病室で監督から聞いたことや、信じてきたものは何だったのか。初めて今回起きた事故に対して不安を感じた瞬間でした。

私と両親との間に起きたこの違いを確認するため、リハビリを見に来ていた監督に真相を確かめました。私の事故がどのような経緯で起きたのかを。監督の

口から出てきた言葉は誰も予想していないものでした。

S:「それおかしいぞって話になって、これはそのまま置いといたらあかかなくて、一回聞いてみなアカンなってことで、監督にリハビリに来てくれはったときに聞いたんですね。監督からはこう聞いたんですけど、両親とは話が違って、実際僕の事故ってどうやったんですかってことを聞いたときに、そこで名前の経緯ではなくて、僕が危険なプレーをしたからって言う話が出てきて。それは僕が怪我する数年前までは認められたプレーで、どこのチームも使ってたんですけど、高校日本代表の合宿で代表候補の子がそれで頸椎をやってしまって、危険なプレーってことで禁止になったんですね。それに準じたプレーをした時点でペナルティが取られてしまう...僕はそれ知って、そんなことはしないという自信があったので、それは違いますよってところから、なんか『その事故後どういうヒアリングをされたんですか』って聞いたら、当日そのへんにいた部員数人に経緯を聞いたりとか、僕に許したってくれよって言った子がなんで分かったかというのも、その子がもしかしたら僕が乗ったかもしれんということの名乗り出ただけみたいで。かもしれないってだけで、それに対する調査、周りにどうやったんやっていうことも聞いてなくて、最終的に向こうから『よう分からんのですわ』って返事が返ってきたんですね。この時に家族の中で始めて不信感が。こんだけ大きな事故が起きたのに、誰が乗ったかは人によって話が違ったり、事故当日の様子もちゃんと周りに話を聞かず、現在に至るまでに全く進展がない」

(中略)

I:「そっか。そしたら、不信感というものは、これだけ大きな事故があるにもかかわらず状況とかをちゃんと調査してないやないかっていう感じやね。そういう不信感？」

S:「そうですね。その話を聞いたのが、9月頃だったんで、約10ヶ月の間、なんとなくこんな感じかかっていうのを放置し続けてきて、さらに僕が危険なプレーをしたかもしれないって...」

I:「君のせいになったかのような」

S:「よくある話じゃないですか、こういう事故とかあって結局本人のせいになってしまって。そんな先入観みたいのもあって、なんで僕なんですかっていう...聞いてみたら、ちゃんと調べてもいないのに、そういう意見もあったというのも、うかつにしゃべってしまう、この事故をどう捉えているんですかっていう所に不信感というか。それまで決して絶対的な信頼を置いていたわけではないんですけど、指導者と部員としての最低限の関係はあったので、そこが切れてしまったというのか、その時初めて...」

不安は、強い「不信感」となって私と家族の心に残りました。

また、事故直後に「日本ラグビーフットボール協会に対する事故報告書」というものが作成されました。

S:「やっぱり父や母からそういう話(事故の経緯)っていうのは聞きにくいってところがあった？それとも、私たちが関与することじゃないって感じやった？(中略)事故がなんで起きたかとか、そのあとどんなことやってはるとか、知らぬ存ぜぬやったやん。試合があれば、応援に行くわというみたいやって、事故のことを掘り下げて話することもなく、高校にあの事故はどうやったんですかと聞くこともなかったのはなんでやったんかかって思って」

H:「一つは事故報告書に、個人が特定できる形で、報告書を出している。事故のその日に私が報告を受けているから、これはもう、いまさらどうこうじゃなくて、誰の目にも、明らかな事故の起き方やと思っていた。行った時に一番に説明されたのがその中身やった。周平がパスした子が押し返されて、首の上に乗って...だから、『そうなんです、ラグビーやらそんなことも起きるよね』って。その親御さんが謝りに行こうかという話になったんやけど、謝る、謝らないっていうよりも、練習で起きたことやから、謝る、謝らないとか関係のものじゃないからって。父はそんなこと言われてもそんな状況では判断できへんって、また後日見せてほしいという風で返した。それはもう動かない事実やと思ってた。いまさら話

題にする必要性もないくらい明白な事実で、事故のことはそれで完結しているもんやと思っていたから」

ざるを得ない現状がありました。

個人が特定できる形で書かれたこの報告書の存在は、当時の両親の心境において「不安」を抱かせない十分すぎるものでした。事故から半年以上も事故のことに触れなかったのは、事故を思い返したくないということよりも、私の事故については「事故報告書」の内容が動かない事実で、すでに完結しているものと考えていたからでした。

しかし、私との話し合いで判明した認識の違いによって「動かない事実」だと思っていた「事実」が、本当にそうであるのか確信が持てなくなりました。

S:「で退院して4ヶ月くらい、夏休み明けて復学するか、せえへんかぐらいの話が出始めた頃に、家族でたまたま事故について話した。なんのあれもなく」

H:「なんかで、ひょっと名前が出たときに私らの記憶にあった名前と、周平が監督から聞いたっていう名前が違うっていうことがわかって(中略)とりあえずね、まず『最初に周平に伝えたのは〇〇のことであって間違いはない。ただ、それも今どうかわからなくなってるんですよ』みたいな話は電話でしたよね。でその流れの中で『生徒の中には、周平が危険なプレーをしたっていう者もいましてね』って。周平は『えっ、絶対そんなんしてへんし』って。だから(監督が言いたいのは)君の取った体勢が悪かったっていうことかって。その後、監督が病院のリハビリ室に来てくれはったときに...」

S:「憶えてる、たぶん起立台にいた時やわ」

H:「『危険なプレーをしてたって聞いて心外やっています。説明してやってください』って伝えて、監督が周平になんか話をしていってたわ。今の話が2003年の9月、で事実関係を確認するために洛西公団(トレーニングのために借りていた部屋)に集まってもうたら、そっから湯呑みを使っただけで事実関係確認になったのが2004年6月の話」

話を進めていく中で内容は二転三転していき、あの「事故報告書」でさえ本当に正しいものであったのか。両親にとって私の事故の対応に何か疑問を抱か